

命を大切にする心を持ち、生き方を創る子どもの育成

～人や自然とのかかわりを大切にした道徳学習プログラムの創造～

北広島町立本地小学校

研究主任 新川 靖

はじめに

北広島町立本地小学校は、中国山地の中央部の中山間地域に位置し、広島市安佐北区と隣接する農村部にある、児童数131名の小規模校である。

本校では5年前から道徳教育を研究テーマとし、取り組みを行ってきた。最初の3年間は主として資料の開発、発問・展開の工夫などの道徳の時間の研究を行い道徳の時間の授業の向上を図ってきた。昨年度からは、文部科学省「児童生徒の心に響く道徳教育推進事業～命を大切にする心をはぐくむ教育の推進に関する研究～」の指定を受け、「命を大切にする心を持った児童の育成」に取り組むこととなった。

しかし、「命を大切にする子ども」の育成を行うには、道徳の時間で、道徳的価値を友達と話し合わせるだけでは十分とは言えない。「命の大切さ、よりよく生きることの素晴らしさ」を感じる体験と道徳の時間の関連性をより深めることが大切であると考えて取り組みを進めようとした。そこで、本校では道徳の時間の授業だけでなく、教科・特別活動・総合的な学習の時間の関連性を深めたり、「命を大切にする体験活動の時間（ライフタイム）」を特設したりする取り組みについて研究していくこととした。

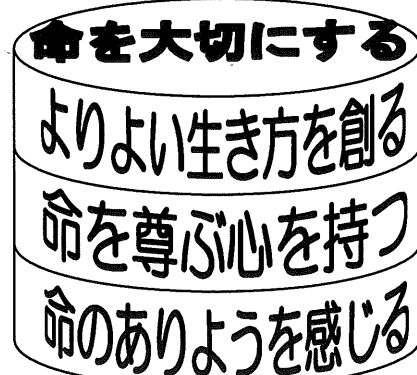
1 「命の教育とは」

児童の中に「命を大切にする心」を育むには、まず「命」を学ぶことが重要であると考え。道徳の時間の中で命について考えたり、さまざまな体験的な活動を通して自然や人々とのかかわりを持ったりすることで「命を尊ぶ心」を育てていきたい。

しかし、「命を尊ぶ心」を育てていくには「命のありよう」を感じる大切である。「命のありようを感じ、尊ぶ心」が「命を大切にする心」であると考え。そして、「命を大切にすること」とは、自他の命の尊さを知った上で、自らの人生をよりよく生きていくことであると考えている。

そこで、本校では、研究主題を「命を大切にする心を持ち、生き方を創る子どもの育成～人や自然とのかかわりを大切にした道徳学習プログラムの創造～」と設定し道徳の時間の学習を核として体験活動との関連を図ることとした。

「命を大切にする心」を育むためには、1時間の道徳の時間の学習だけではなく、ある程度長期的な学習プログラムの中で、児童の意識の変容をじっくり見取りながら育てていく必要がある。それは、道徳性がすぐに変化するものではなく、また、道徳性が言語化できる部分だけでなく、行動を含む非言語的な部分にも潜むものであるからである。また、「生命の尊重」という人間の根幹にあたる価値観は、道徳の時間や



命を大切にする
よりよい生き方を創る
命を尊ぶ心を持つ
命のありようを感じる

教科・特別活動・総合的な学習の時間、体験活動とそのふりかえりなど、学校教育全体の様々な活動を通してじっくりと育てていくことがふさわしいと考えるからである。このことは「生き方を創る子どもを育む」ことにも当てはまる。道徳の時間を中心として、総合的な学習の時間、教科・特別活動・総合的な学習の時間、そして特設する「ライフタイム」（命や生き方を感じるための時間）を有機的に組み合わせ、児童の変容を見取りながら、様々な人々のよりよい生き方と出会わせたり、体験させたりすることで「生き方」に対する児童の意識を高めたり深めたりしていきたいと考えた。

そこで「命を大切にできる心を持ち、生き方を創る子ども」を育成していくために「道徳学習プログラム」を計画していくこととした。まず、「プログラム構想図」を作成し、育てたい子ども像にむけた児童の意識の流れを大切にし、その意識を育てることができるような学習活動を示すようにした。さらに、プログラムの実施においては、一人一人の児童の育ちや、変容を見取っていくことで児童の道徳性の変容を評価していこうと考えた。

2 道徳学習プログラムの特徴

本校の推進する道徳学習プログラムには次のような特徴がある。

- (1) ライフとキャリアの視点に立った道徳学習プログラムの実施
- (2) 4つの意識の段階を大切にされたプログラム構成と構想図
- (3) 命と向き合う時間としてのライフタイム（特設）
- (4) 児童の道徳性の変容を見取っていくための方法

以下、これらについて詳しく述べていく。

2-(1) ライフとキャリアの視点に立った道徳学習プログラムの実施

本校では、ライフとキャリアの二つの視点で道徳学習プログラムを実施している。

ライフ、キャリアのプログラムでは、それぞれ下のような心を育てることをねらいとしている。

ライフ・・・命を大切にする心

(命のありようを感じ・考え、尊ぶ心)

キャリア・・・自分の生き方を考え、

よりよく生きようとする心

1年生の入門期では、栽培活動などの命を感じる活動は進めながらも、きまりを守って生活しようというプログラムを実施する。2学期からは、ライフについてのプログラムを行っている。2年生以降では前半はライフ「命を大切にする心」を育てるプログラムを行い、後半では、キャリア「よりよく生きようとする心」を育てるプログラムを行っている。

① ライフを視点にした道徳学習プログラムについて

前述のように、命を大切にする心は命のありようを感じることから始まる。1学期に行ったプログラムでは、育てたい子ども像には系統性を持たせているが、ライフタイムの自然観察などでは、よく似た活動が多く学年にわたり取り入れられている。それは、道徳性が個の発達によって大きく違うこと、そして、同じ活動であっても感じることは発達段階によって違うと考えたからである。例えば、「身の回りの命をさがしてみよう!」と虫を探したときに、低学年であれば虫を見つけた喜びが虫たちへの愛おしさになり、理科で虫の体について学んだ中学年であれば、みつけた虫の体のつくりや形に生命への不思議さを感じるであろう。高学年であれば、今までの経験や歴史、環境問題を学習したことで虫たちが生きていることに対して「このような場所で生きているのか。」「ずっと命がつながっているのだな。」「昔からこの場所で変わらず生きているのだな。」などと感じ方の広がりもあると考える。そして、この感じ方の違いは一つの学年、学級の中にもある。見方、感じ方を伝えていきながらも、ぜひ何度も命に触れ、感じさせる時間を体験させたいと考えている。

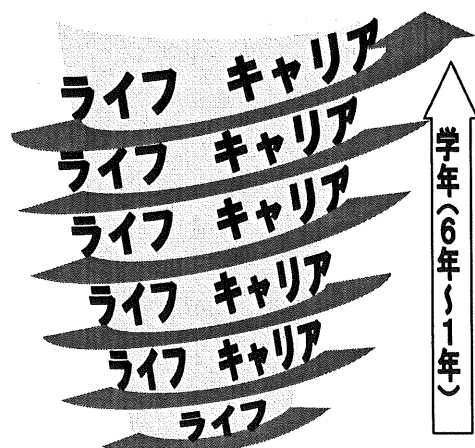
② キャリアを視点にした道徳学習プログラムについて

後半では、それぞれの学年に応じて「自分はどのように生きていったらよいのか」考える。低学年・中学年では、家族の一員として、学級の一員として「僕には何ができるのかな」ということを考えさせてよりよい生き方を考えさせる。高学年になると、ライフのプログラムの中で感じた命のありようから自分の命、そして生き方に考えが及び、命を大切にする心が「よりよく生きること」と結びついてくる。学年があがればあがるほど、ライフとキャリアの視点は近づき、明確に分けることはできなくなると思われる。

これらの二つの視点を持った道徳学習プログラムを6年間を通してスパイラル状に配置して取組みを行っている。

図 螺旋状におこなう

道徳学習プログラムのイメージ



2-(2) 児童の意識を4段階にしたプログラム構成と構想図

①道徳学習プログラムの作成手順と児童の意識の4段階について

道徳学習プログラムの計画を立てるにあたっては、まず、そのプログラムで**育てたい子ども像**を設定する。そして、今の児童の実態から育てたい子ども像に向かっての意識を無理なく自然に連続させていくには、どのように変容を導いていけばよいのか想定する。この**児童の意識の流れ**を本校では4段階に設定している。(この4段階を「ふれる段階」「気づく段階」「深める段階」「創る段階」とした。それぞれ、下の表のようなねらいを持っている。)そして、そのような意識を生み出すために、道徳の時間を核として、ライフタイム(命を考える時間)、教科、特別活動、総合的な学習の時間、日常的な指導、家庭との連携を配列している。

そして、道徳学習プログラムを通して児童の意識が変容していくと、行動にも変容が見られてくるはずである。この道徳学習プログラム実施中から実施後に見られるであろう、学校や家庭・地域での児童の変容の外的兆候(シンプトム…後述)を**学習後の児童の姿**として設定している。これは、児童の変容を評価していく視点の一つとしている。

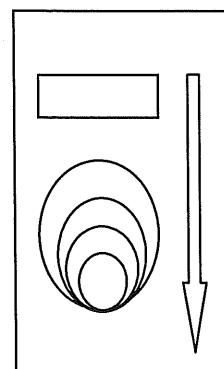
【表 児童の意識の流れの4段階】

段 階		子どもの意識の具体例	指導上の留意点
ふれる	◎学校生活や体験活動を通して道徳的価値にふれる。 （子どもはその価値に気がつかなくてよい。）	○生き物をとるのは楽しいね。 ○たくさんの生き物がいるんだね。	様々な活動の中で価値を作っていくのにつながる活動や体験を指導者が意識していく。
気づく	◎道徳の授業や体験活動を通して道徳的な価値の認識（再認識）をし、その必要性について気がつく。	○生き物のお世話をしっかりしたいな。 ○生き物も一生懸命生きているんだね。	児童が活動や体験、授業の中に価値の存在を見つけたり、つながりを感じたりする。
深める	◎道徳的価値につながる価値について道徳の時間や体験活動を通して、その価値の意義や大切さについて考える。	○生き物の立場に立って世話しないとイケないんだ。 ○僕たちは本当に生き物に優しくしていたのかな。	自分の生活やこれまでの体験をもとに価値の意味についてくわしく考えさせる。
創る	◎実践化につなげていく。そのために今までの学習や体験などを基に目指す子ども像につなげる道徳的な価値について考えたり、体験をしたりする。	○生き物を大切にしていけるには僕に何ができるかな。 ○生き物がたくさん住む川をきれいにしていきたいね。	もう一度、同じ価値について学習を行ったり、今までより、さらに高い新しい価値について考えたり体験したりすることで「〇〇していきたい。」という意欲を育てる。

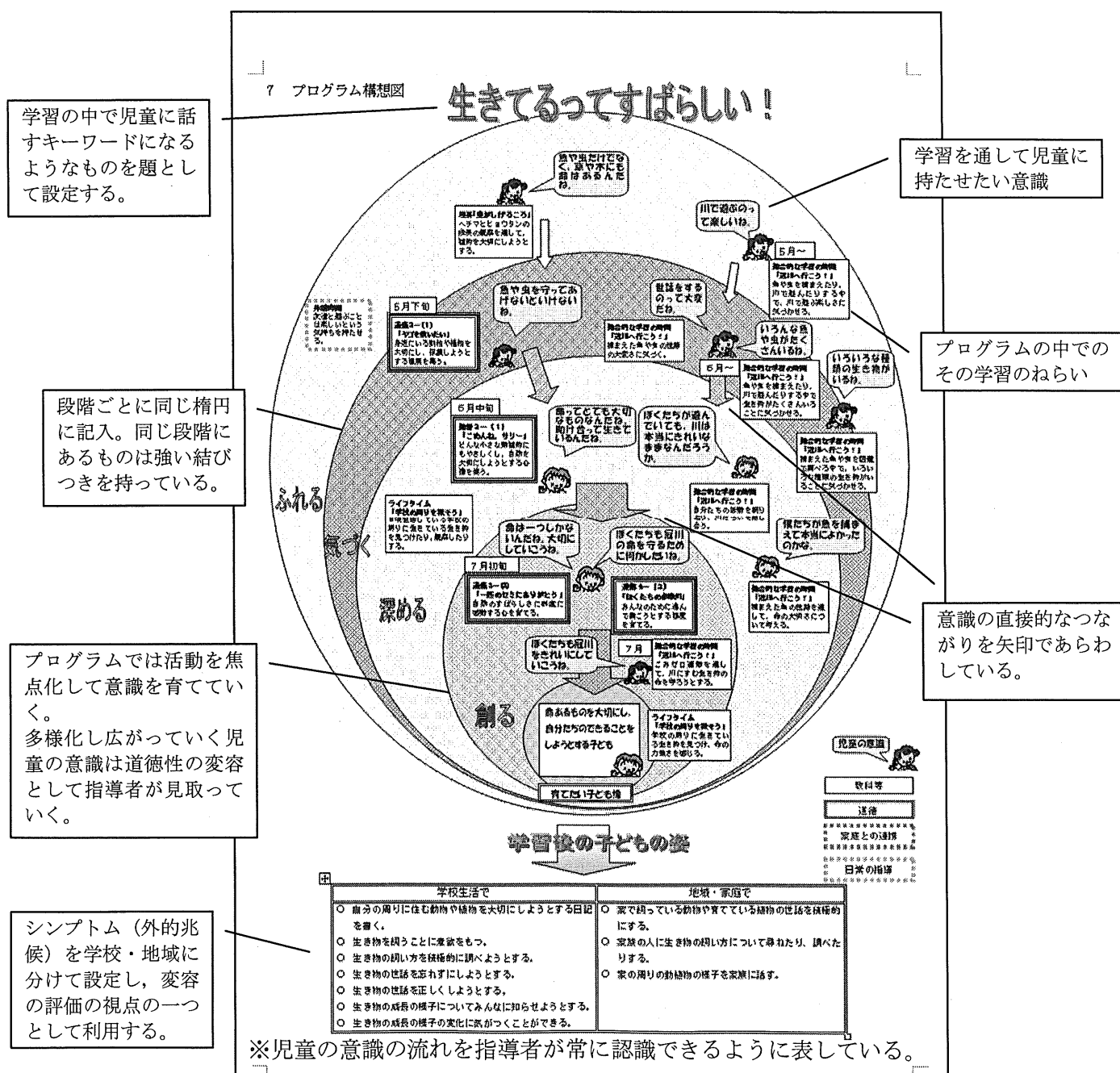
②道徳学習プログラム構想図

道徳学習プログラムを作成するにあたり本校では意識の流れを表すことを大切に、楕円形の中にまとめることとした。これは、すべての教育活動を大きな川の流れと例えると、その一部を切り取ったものともいえる。最初、ある程度の大きな広がりがあったものが学習を進めていくうちに道徳的価値、育てたい子ども像という視点で焦点化されていくことを小さくなっていく楕円で表している。

「児童の意識のつながり」は矢印で表現しており、最初、いくつかの流れがあった意識が学習を進めていくうちにつながり、大きな流れとなっていく。楕円が小さくなればなるほど意識の流れは強くなり、価値が高まっていくことを意味している。



【例 プログラム構想図】



2-(3) 命と向き合う時間としてのライフタイム(特設)

①ライフタイムとは

命を大切に作る心をはぐくむためには、1時間の道徳の授業だけでは十分ではない。道徳の授業で心を育てるとともに、命の大切さを実感できる時間、体験が必要だと考えた。そこで、児童が命に触れる体験活動、命や生き方について考える時間を特設することにした。教科等、それぞれのねらいを持つ時間ではなく「道徳学習プログラム」の中での必然性やねらいをもつ時間である。「ライフタイム」と名づけ、効果的にプログラムを進めることができる体験活動を学年の実態やプログラムのねらいに合わせて行うこととした。

「ライフタイム」は、体験的な活動を通して、「命」について考え感じる時間であり、「命のありよう」を実感する時間、生き物の生と死、すばらしさ、力強さを感じる時間、自分の命とそのつながりを感じる時間、自らの生き方について考える時間である。そこでは自然や人々とのかかわりを持つことを大切に活動を進めていく。身近な自然に目を向けたり様々な人々のよりよい生き方と出会わせたり、体験させたりすることで、命や生き方を感じさせることができると考える。(必ずしも45分を必要としない。帰りの会等の15分程度の活動もライフタイムとする。)

☆活動の例

- ・ 時間の長さを包装テープで表して時の長さを感じる。
- ・ 校庭にある生命(植物・虫)を探す。
- ・ うさぎや馬や牛など動物に触れる。
- ・ 産婦人科の先生などのゲストティーチャーに話を聞く。
- ・ 歌に自分の夢、生き方をさがそう など

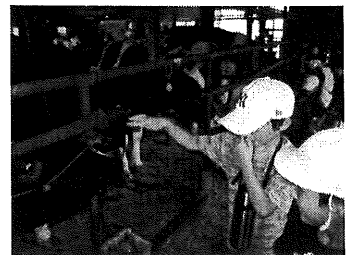
②具体的な実践事例

〇2年生「校庭の生き物 見つけたよ」

校庭の生き物を観察し、見つけたことをワークシートに記録した。普段見過ごしていたところを注意してみると、身近なところに色々な種類の生き物がいることに気づいた。また同じ場所を継続して観察することで、虫たちがだいたい同じ場所で生きていることにも気づき、生き物の不思議さを実感させることができた。

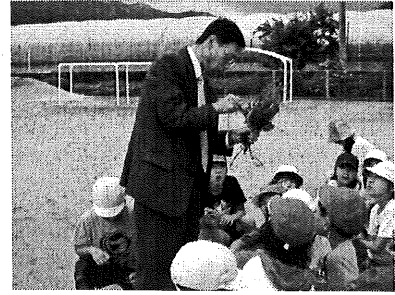
「牛の赤ちゃんを見に行きたよ」

牛を飼っている家に、子牛を見せてもらいに行った。間近で見る牛の大きさや子牛のかわいらしさを感じさせることができた。初めはこわごわ見たり触ったりしていたが、牛の赤ちゃんがお乳を飲むように指を吸ってくれたことで、子牛に対する親近感・愛情がふくらんだ。動物に触れ感じる体験活動であった。



○4年生・5年生「自然観察(菅井啓之先生をお迎えして)」

校庭にある草の花をさがした。いつもは気づかない草でも、よくよく見ると小さなかawaii花をつけていることに気づいた。また予想以上にたくさんの種類があることにも驚いた。また虫食いの葉っぱを探してみると・・・大きな穴もあれば小さな小さな穴がたくさんあいているものもあった。葉っぱを並べてみると一つ一つ違った虫食いの穴のおもしろさを感じた。小さな草の花から命のたくましさを感じたり、虫食いの葉っぱから一つ一つ違うおもしろさを感じたりした。



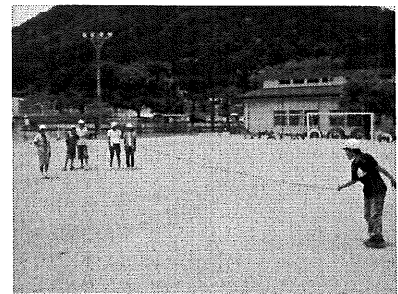
○6年生「同じものを探そう!」



校庭の草の根を途中で切らないように掘り、たくさん草は生えているがそっくり同じものがあるか調べた。タンポポの根は掘っても掘っても一番先まで掘りだすことは難しい。土の中で石の間をぬうように根をはっている。同じ種類の草でも根の形や根のはり方も違っている。一つ一つの植物の命のたくましさ、力強さを感じる体験活動だった。

「テープを使って時間をさかのぼろう」

自分の生きてきた約10年間で1mmとして、人類の祖先が誕生した2400万年前まで10mテープを使ってさかのぼった。あまりに長い時間をかけて自分たちの命が受け継がれてきたことを感じさせる体験活動を行った。そうしてずっとつないできた大切な命をこれからも自分がつないでいくことを考えた。



「歌に自分の夢・生き方をさがそう」

「これからしばらく自分の生き方を考えていこう」となげかけた後、歌の中で自分の夢や生き方をさがすようによびかけた。家庭で家の人と一緒に歌をさがしたり自分の好きな歌の中からさがしてきたりした。見つけた歌の歌詞を順次カードに書いて教室に掲示した。自分の夢や生き方について考えたり、友達の見つけた歌の歌詞を互いに読んで友達の考えから学んだりすることができた。(常時活動)

2-(4) 道徳性の変容の評価のために

道徳学習プログラムの中での道徳性の変容の評価

道徳学習プログラムは、児童の実態から育てたい子ども像に向けての児童の意識を変化させ道徳性をよりよい方向に変容させることをねらいとしている。そのねらいを十分に達成させるためには、児童の道徳性がどのように変容していったのかを指導者が評価していくことは大変重要である。そして、一つのプログラムが2ヶ月以上にわたる長期間のものであることなどから、プログラムを実施している際の児童の道徳性の変容をしっかりと見取り、学習プログラムを児童の道徳性の状態と共に修正・変更したり、指導上の工夫をしたりしていくことが必要となってくる。

また、道徳性は一人一人持っているものが違うという点、言葉に表すことができない非言語的な部分が大きいという点から、その児童の変容を「見取っていく」という立場を取りいくつかの工夫をすることにした。具体的な工夫点を以下に示す。

- ① 段階ごとの児童の行動・記述の見取りについて
- ② シンptomによる評価
- ③ 家庭からの評価

児童の行動・記述の見取りについて

道徳学習プログラムの中では、育てたい子ども像に向けて児童がどのようにして変容していったか、その様子を指導者が記録していく。その際には、児童の発言・行動の様子、授業等で書いたワークシート、マイハート（道徳ノート）、日記などを資料とする。本校では、指導者（担任教諭）のみが記録をつけて見取っていくのではなく、すべての教職員で記録をつけて情報交換を行う時間を設定し、なるべく多くの目で子ども達の見取りを行うことで客観性を持たせることができるようにしている。

また、この見取りを行う際には、児童の行動の大きな変化ばかりに目を向けるのではなく小さな変化にも目を向けるように心がけている。たとえば、合掌をする際にいつも大きな声で元気よく言っていた子が、丁寧に少しゆっくりと言ったとする。合掌をするということには変わりはないが、その前にプログラムの中やマイハートで「食事と命のつながり」について考えたのであれば、それは児童の様子の変容である。感じたことが行動となってあらわれてきていると考える。変容が大きく見える児童もあれば、そうでない児童もいる。個々の変化に目を向けわずかな変容を見逃さないようにしていきたいと考えている。

☆右の表は、前期プログラムの児童の記録を一覧にしてプログラムの振り返りを行ったものである。（並べ替えなどができるので記録をパソコンに入力していった。）この評価の充実を図りたい。

2	c	d	e	f	g	h	i	j	k
学習前	何事にも一生懸命取り組む。自分ができる範囲で頑張るという気持ちが強い。	コンコン努力はしないががんばることはできる。	一生懸命努力することができているが、プロゴルファーになるという夢を持っている。	その時々でがんばるが継続しない。プロゴルファーになるという夢を持っている。	何事にも一生懸命取り組むことができる。	意欲はあるが行動につながらない。	努力をする姿は時々見られる。頑張る姿は見られないが自分なりにがんばっている。	がんばることが少なくなってきた。	何事にも一生懸命取り組む。自分ができる範囲で頑張るという気持ちが強い。
ふれる	人生を大切にしようとする人になる。								
ぎづ	みんなが喜んでいて自分もうれいとき	仕事を任せられたらきちんと責任を持つ	人のためにすることが仕事だ。学生で勉強して分かった。	自分のためにすることが仕事だ。学生で勉強して分かった。	仕事とは自分たちでできること。	やったらそれだけの価値のあるもの	家族のために仕事がある。	仕事は考えられたことをきっちりやること	
5	深める	☆私にも何事にも熱心深くがんばりたい。	☆最後まであるべきことをやるという意識が強い。☆私にも何事にも熱心深くがんばりたい。	☆人のためにやるべきことをやるという意識が強い。☆私にも何事にも熱心深くがんばりたい。	☆三木さんを尊敬して進んで生きたい。	☆私自身としてもやるという気持ちがあったのがなごうやめた。☆三木さんを尊敬して進んで生きたい。	☆私自身としてもやるという気持ちがあったのがなごうやめた。☆三木さんを尊敬して進んで生きたい。	☆三木さんのようにあきらめずにがんばる人間になりたい。	☆三木さんはすごく日本の人たのこを覚えてきたと思う。
6	創る	☆サッカーのキャプテンとしてがんばりたい。							
学習後	毎日の振り返りをきちんとしていた。	学習はついでにやるからいい。☆私にも何事にも熱心深くがんばりたい。	毎日毎日自分の将来を思い描いてきた。☆私にも何事にも熱心深くがんばりたい。	一生懸命学習することができた。	みんなががんばってこれまでにやっていたことがふり返りなごうやめた。☆三木さんを尊敬して進んで生きたい。	学習はしっかりとやりやっていたがふり返りなごうやめた。☆三木さんを尊敬して進んで生きたい。	学習発表会の失敗（本人しか分からないもの）が悔しくて家で泣きました。	親戚など責任を持って作業を行う。学習発表会では自分の役割を一生懸命果たした。	学習発表会では毎日しっかりと反省を書いている。

マイハート

道徳学習プログラムを通して使うノート。そのプログラム内の学習において、児童が思ったことや考えたことなどを自由に書くことができるようにしたり、ワークシートを貼るなど学習の足跡を残したりする。学年やプログラムの内容に応じて効果的な利用をするようにしている。



② シンptomによる評価

前述のように、道徳学習プログラムには学習後の児童の姿を設定している。ここには、この学習プログラムの育てたい子ども像に向けて、児童の持つ道徳的価値が変容してくれば見られるようになってくる外的兆候（シンptom）を想定し記述している。学習を進めるにつれて変わっていく、児童の行動をチェックしていく方法で評価していく。

下はシンptomの具体例である。ややもすると抽象的な表現になるので、なるべく具体的な記述になるように心がけている。

- 命に関わる話題のときに、話し手を見たり姿勢を正したりして真剣に話を聞こうとする。
- 命についての視点を持った日記を書いたり、発言をしたりする。
(命をいただく、死なせたくない、大切にしたい、不思議だ、一つしかない)
- 目にした生き物に優しくかかわろうとする。
- 生き物を飼うことに対して自分なりの考えを持つ。
- 自分の生まれる前のことに興味をもっているような、記述・発言をする。
- 水やりに行くことを面倒くさがらなくなる。
- 積極的に生き物にかかわろうとする
- 家庭で命についての発言をする。

③ 家庭からの評価

シンptomの中にも家庭・地域の様子を設定しているように家庭での児童の様子についても評価活動を行う。6学年の前期プログラムでは、命についての道徳の時間の保護者参観を行い、保護者にこれからの取組み（プログラム）についての意識を持ってもらい、学習後、家庭の協力を得て学級通信で右のようなアンケートを行った。保護者も子どもの様子を振り返り、わが子の変容に目を向けてくれた。

以上のような取組みで行った評価を指導者が総合的に判断しながら個々の道徳性の変容を評価している。この活動は日々行われ、道徳学習プログラムの各段階で振り返り、個々の児童の実態の理解を努め、子どもの変容をよりうながすような改善や工夫を行うようにしている。そして、最終的に個々の結果から全体の傾向をまとめ、プログラム後の道徳教育の工夫、次年度のプログラムの改善に生かすようにしている。

☆資料 家庭へのアンケート

本校小学校6年生学級通信 平成18年7月19日 No. 44.

Grow-Up!

命を大切に!

◇ 昨日、1学期の反省について子ども達が話し合っていました。今学期、子ども達が頑張ってきたことの中に「命について考えました。」という意見も出てきました。1学期、道徳などを通してみんな考えてきたこと、それは「命について考える」ことでした。最初は「命って何だろう」ということについて話し合いました。(一度しかない、どんなものにもひとつだけ、なくなったら終わり)。とても大切、おうちの人からの贈り物などの意見が出ました。◇ 参観日には、自分がどれだけ大切に思われて生まれてきたのかを考える道徳をしました。その後、自分の命の長さ、人類誕生からの長さを体験してみました。草花が一生懸命生きていくことを知ったり、道徳で死について考えたり、最後まで頑張ろうといきめいた少女のことを考えたりもしました。◇ そうやってすごした1学期、学校の中では子ども達は「命を大切にしたい」という聲を聞かせてくれました。おうちはどうだったでしょうか？ 今後の6年生の学習や道徳教育の参考にしたいと思っておりますので、下のアンケートにお答えください。よろしくお願いいたします。(子ども達と話をしながら付けていただければ結構です。)

名前 ()

① お子さんの家で生きものの世話について

() 以前とかわらない・・・(ほとんどして)

() すこしするようになった

() よくするようになった

() 前からよくしている

② お子さんの「命の大切さ・尊さ、人生の大切さ」の考えについて

() 以前とかわらない・・・(あまり考えていない)

() すこし話したり、考えたりするようになった

() よく話したり、考えたりするようになった

() 前からよくしている

③ お子さんを見ていて命を大切にしようとしているなあと感じる事が

() 以前と変わらない・・・(感じる事が無い)

() すこしある

() よくあるようになった

() 前からよくある

第6学年 道德学習プログラムの計画

指導者 新川 靖

1 プログラム名

「命ってやっぱりすばらしい！」

2 期 間

5月～7月

3 本プログラムでの育てたい子ども像

命の不思議さ、偉大さを感じ、すべての命を大切にしようとする子ども

4 中心項目

生命尊重 3－(2)

5 関連項目

敬けん 3－(3) 家族愛 4－(5)

6 プログラム設定の理由

- 本学級の児童は、命の大切さについて前学年において総合単元的な道德学習のユニットを通して考えてきた。様々な人々が命や人生を大切にしようがんばっている姿を学び、人の命の尊さについて学習していく中で、「命は一つしかない大切なものであり一度きりしかない人生を充実したものになりたい」という考えを持つ児童が多く見られるようになってきた。しかし、人の命という視点をクローズアップしてきた点からすべての命と自分の命との関わり方について考えることが少なく「命のありかた」を感じるには至っていない。また、短期間に集中して価値観について考えてきたという点から、体験・実感を通しての価値の内在化はまだ十分ではないと考えている。

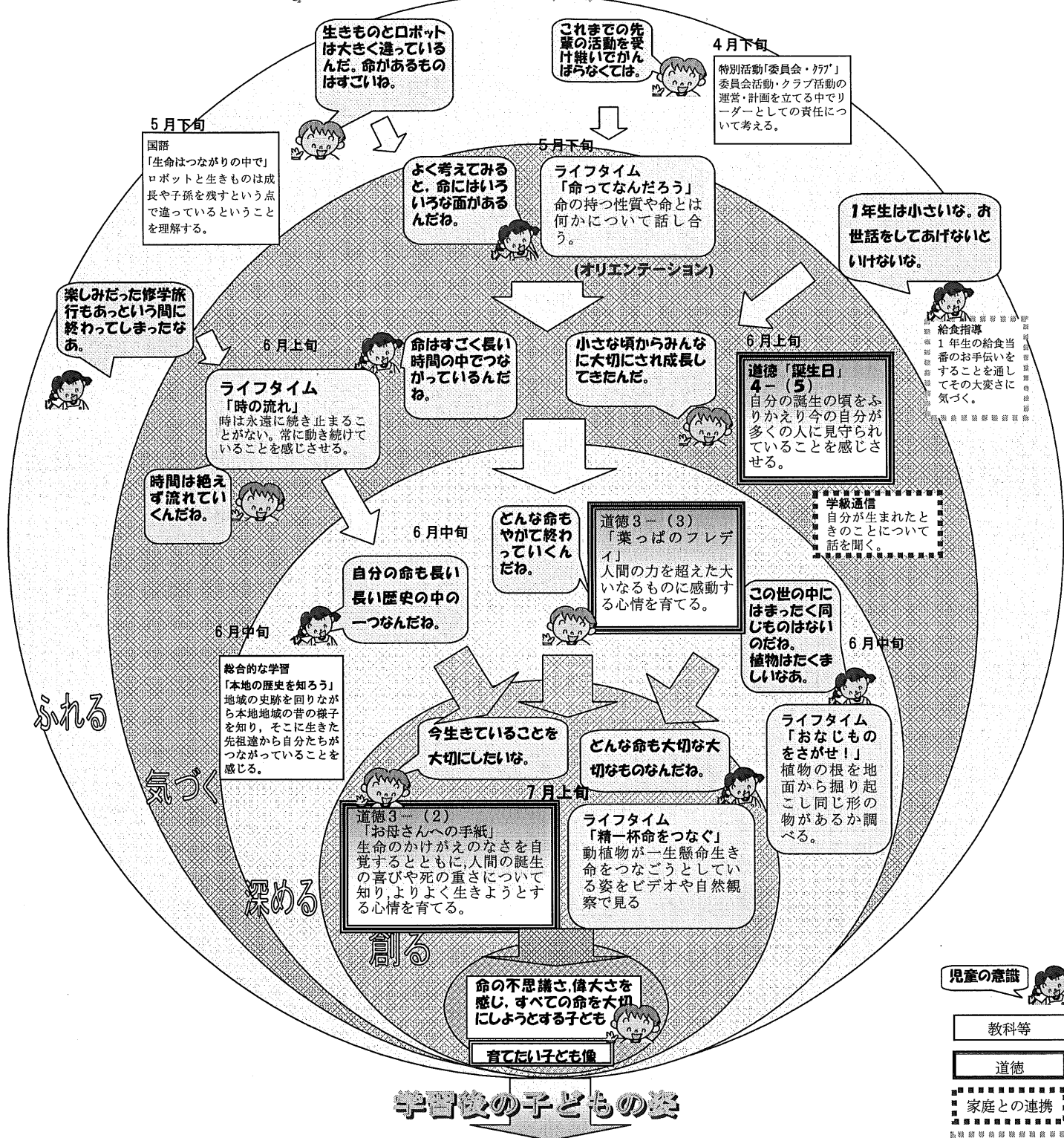
現在、6年生になり、学習の内容も多岐に渡り事象のとらえ方も深まってきている。また、昨年の学習から命や生きることについて関心を持っている児童も多い。本学級の児童にとって、これまでに学んできた命についての様々な知識や考え方を、身の回りにある命との関わりを大切にしたい体験活動で感じたことと統合していくのに適した段階にあると考えている。そして、命のすばらしさについてより深く捉えることにつなげていけると考えている。

- 「命は大切なものである」ということについては、どの児童も早い段階から知識としてしっかりと兼ね備えている。また、命の有限性や連続性などについても小さい学年から学んできている。しかし、それは知識として伝えられているものであり、実際の身の回りにある命をとらえる目が十分育っているとは言い難い。その一因として、核家族化が進み、さらに人間の生死の瞬間のほとんどが病院の中で扱われている現代において、身近に生や死を感じるものが少なく、命の大切さが感得されにくくなってきていることがあげられる。このことは「命のありかた」について言語上の知識として知っているだけで、自身の実感を伴った理解となっていないともいえる。児童のものの見方・考え方・捉え方が発達してきた6年生の段階でもう一度、命の尊さを感じる体験活動を意図的に仕組み、これまでの知識や体験を統合しながら振り返っていく活動を行うことは、実感をともなう「命を大切にしたい心」を育てていくのに大変有効であると考え。そして、改めて命の尊さを感じた上で、自他の命を大切にしていこうとする意欲・態度をこの段階でもう一度育て、よりしっかりとしたものにしていくことは重要であると考え。

○ 指導にあたっては、各段階で次のような点を留意して行う。

「ふれる」段階	自分の成長や5年生の学習を振り返り、命への関心を高める段階 最高学年になった自分を見つめさせ、6年という年月がすぎたことを実感させたり、一年生と今の自分を比べさせて成長してきたことを振り返らせたりする。国語では、説明文の学習から生き物とロボットの違いについて考えさせたり、筆者の思いと道徳学習プログラムとして捉えさせたい部分が重なる段落を暗唱させたりする。このような活動を通して、命が様々な側面を持っているということについて考えさせ、命の持つ性質への関心を高めておく。
「気づく」段階	命の様々な面を確認し、自分の命の成長と時間の流れの関係をを感じる段階 ライフタイムでは、命とはどういう性格を持つものか話し合い、これまで学習してきたことをまとめるとともに、自分たちが命について知っているようで知らないということを感じさせプログラムを学習していくことへの意欲を持たせる。そして、道徳の学習「誕生日」（4－（5））を通して、「命が誕生したときの家族の気持ちを考えさせ、命が生まれる喜び」を感じさせる。また、家庭で自分の誕生の時のことについて話を聞いてくることを通して、自らもまた大切な命の一つであることを感じさせる。また、ライフタイムでは「時の長さ」を体感できる活動を行い「時間は大きな流れの中で絶え間なく流れ続け、自分の命はその流れの中の一つであり、自分の命までに多くの命が繋がっていること」に気づかせる。
「深める」段階	命の個性や有限性について感じる段階 総合的な学習の時間では本地地区の歴史について調べる中で自分たちが生まれるはるか前から、人々が本地に生き、自分たちに命をつないできたことを感じさせたい。道徳の学習「葉っぱのフレディ」（3－（3））では「命が大きな時間の中で生まれそして死にゆくものである」ことについて考えさせ、自分や周りの命の有限性について感じさせたい。また、ライフタイムで「同じものをさがそう！」では同じ形の植物や根っこをさがしたり、たねを探したり、「一見、同じように見えてもこの世の中には同じものなどないことやしっかりと根を生やして命を生きている植物のたくましさ」を体感させる。
「創る」段階	命を大切にすること、よりよく生きていくことの大切さを考える段階 これまでの学習をもとにライフタイムでは、自然観察を行い、命は限りがあるからこそ、周りにある生きものたちは命をつなごうとしているということを感じさせる。道徳の学習「お母さんの手紙」（3－（2））においては、病に負けず前向きに生きようとした女の子の生き方から、命あることの喜びとよりよく生きていることのすばらしさについてこれまでのプログラムを振り返らせ、自らの命を大切にしていきたいという意欲を持たせたい。
学 習 後	命について関心をもち、命を大切にする様々な姿勢が見られることを期待する。 栽培している植物の世話を気持ちよくするようになったり、身の回りの動植物に対してどんなものであっても「命を持っているもの」であるという見方をしたりするようになることを期待する。そのことがマイハートに記述されてくるであろうと考える。また、家庭で命に対する感じ方が深まっている様子が見られ家族がそう感じることを期待する。

命ってやっぱりすばらしい！



学校生活で	地域・家庭で
○ 命に関わる話題のときに真剣に話を聞こうとする。 ○ 命についての視点を持った日記を書いたり、発言をしたりする。(命をいただく、死なせたくない、大切にしたい、不思議だ、一つしかない) ○ 目に付いた生き物について優しくかわろうとする。 ○ 生き物を飼うことに対して自分なりの考えを持つ。 ○ 自分の生まれる前のことに興味をもっているような、記述・発言をする。 ○ 水やりに行くことを面倒くさがらなくなる。 ○ 積極的に生き物に関わろうとする。	○ 家庭で命についての発言をする。 ○ 動植物の世話を一生懸命しようとする姿が見られる。

第6学年 前期プログラム 成果と課題

実施時期	5月中旬～7月中旬	
プログラム名	命ってやっぱりすばらしい！	
育てたい子ども像	命の不思議さ、偉大さを感じ、すべての命を大切にしようとする子ども	
学習後の子どもの姿について○成果●課題	学校生活で	地域・家庭で
	○児童に対するアンケートの結果では、生き物を大切にしようとして動植物の世話を一所懸命することができていた（89％）、普段の生活で生き物を大切にしようとした行動をとった（92％）、命のことについてよく考えることはあった（100％）、などと児童にとって満足感の高い学習となっていた。 ○命を大きな視点（地球には、山には・・・など）で見つめていた児童がだんだんと小さなところにある命の不思議さを見つけ、命の概念をしっかりと捉えるようになってきた。（17名） ○後悔しないように一生懸命生きていきたいと考えた児童は6名であった。 ○普段の日記に自ら、命のつながりや時間の大切さについて考えた児童が9名いる。 ●大きく行動や考えの変わっていない児童が2名いた。	○以前と比べて、子どもが家庭で生き物の世話をするようになってきていると答えた保護者は54％、以前からしているは12％。 ○命の大切さについてよく話したり、考えたりするようになってきたと答えた保護者69％ ○命を大切にしようとする姿が見られるようになってきたと答えた保護者74％。 ●すべての項目で、「以前と変化無し」と答えた保護者2名。
プログラムの構成と改善点について	ふれる段階	6年生になるまでの自分をしっかりと振り返ることで自分の成長をしっかりと感じ取らせることができた。 インゲン豆の栽培も実際の活動では取り入れた。種を植えるところで一つとして同じものはないことを体験することができた。また、常時活動として水やりを行った。
	気づく段階	ライフタイムで命の性質をまとめることで、自分たちは命のことを考えてきたが、しっかりわかっているようで、わかっていないことを実感し、道徳学習プログラムへの意識を持つことができた。また、保護者参観日の時に主人公が生まれたときの話を資料として道徳の時間の授業を行い、帰ってから各家庭で自分はどうかであったのか子ども達が聞き取りをして感想を書いた。自分の命の誕生を家族が喜んでいてことを知り子ども達はうれしいという感想を書いていた。また、保護者も生まれたときの喜びを改めて思い出せてよかったと感想を書いていた。この取り組みで各家庭に道徳学習プログラムのことについて伝えることができ学習後のアンケート調査へとつながっていった。
	深める段階	道徳「葉っぱのフレディ」（3－（3））では、命の持つ重要な性質である「死」について考えることができて良かった。前の段階までの学習が、「死」を学習することによってさらに深まりを持つことができた。また、総合的な学習の時間で行った歴史調査では時は過ぎ人々は移り変わっていくことを感じる事ができていた。ライフタイムでは植物の根を掘り起こして同じものをさがす活動を行った。命あるもので同じものは二つとないことを児童は実感していた。また、この活動では根を傷つけずに掘ることで柔らかい根が固い土の間に伸びていっていることを見つけ、命の強さを感じ命の姿をしっかりと見ようとする姿勢が育った。
	創る段階	すばらしい命をしっかりと生きていこうという意識を育てるために、道徳の時間では「お母さんへの手紙」を学習した。ここまで感じてきた「命の素晴らしさ・不思議さ」を自分の生き方へ向けていった。命を大切にしていきたい、一生懸命生きていきたいという感覚を持つことができた。このときの感想を2学期のプログラムにつなげていくように考えている。また、計画と違い実際の活動では、偶然ベランダにツバメのひなが落ちてきたのを拾った子がおり、名前を考えたり世話をしたりする活動をライフタイムとして行った。
	その他	後半の展開が忙しくなってしまった。もう少し早い時期からスタートすることも可能であると感じている。しかし、全体的な傾向として児童は命のありようについて大変よく考えることができていた。

5 おわりに ～実践を振り返って～

学級担任として児童とかかわる中で、この取組みを通して、「命を大切する心」が育ってきていると感じるようになってきた。（それぞれのプログラムのたびにまとめる記録にも裏打ちされ、結果には現れているのであるが。）ふとしたときの日記の中に見られたり、学級での会話の中で児童の命に対する思いが現れたりしてくる。また、「ずっと受け継いでいってほしい本地小学校の良いところは？」と聞くと、「命を大切にすること」「地域を大切にすること」という答えが返ってきた。命や生き方を学ぶことと「本地っ子学習」（総合的な学習の時間）とが結びついているのである。

「命のありよう」を体で感じる場としての体験活動（本校ではライフタイムを核としている）、資料を通してみんなで交流しあって体験活動で感じていたことが何であったのかを明らかにする場としての道徳の時間。この二つが継続的に連動していくことで、児童の「命を大切に感じる心」の育ちはより確かなものとなっていく。そして、「命を大切に感じる心」が育ってきた児童は、その後の生活や体験の中から、命を感じる場面を見つけ、ますます自らの「命を大切に感じる心」を育てていくのである。「命の教育とは、「命を感じる心（センサー）」を児童の中に根付かせ、その成長を促していくこと」だといえるのではないかと実践を通して感じるようになってきた。命を大切に感じる心を持った児童は、指導者の予想を超え、小さな事象から命のありようを見つけ出すようになる。命のありように体験を通して出会う場、命のありようを自らを見つける場として、体験活動には大きな役割があるのではないだろうか。児童に命のありようを感じさせる指導者自身の「命を感じる心（センサー）」こそが、しっかりとしたものになっていないといけなさと感じている。

図 体験と道徳の時間をつなげ命を感じる心を育てる

生活体験・体験活動（生活科・総合的な学習の時間・特別活動・教科）

「命のありよう」「よりよい生き方」に五感を通して出会う

体験して気づく



例 川にはいろいろな動植物がいるね。

道徳の時間

- 「命のありよう」「よりよい生き方」を見つける目（センサー）を育てる。
- これまでに「感じたこと」を整理し、価値づける。

見えていなかったものが見える



僕たちのまわりの生き物の小さな命も一生懸命生きてるんだね。

生活体験・体験活動（生活科・総合的な学習の時間・特別活動・教科）

「命のありよう」「よりよい生き方」を見つけ出し、自らの価値を高める。



あ、こんなところにもいろいろな生き物がいるね。たくさんの命があるんだな。

より高い価値へ